

2024年2月11日 説教「聖霊が臨み」

使徒の働き 19章 1～9節

第二回伝道旅行を終えるべく、パウロはエルサレム教会で宣教報告をし、北のアンテオケ教会でも宣教報告をした後に、長居はせず、早速第三回伝道旅行へと旅立っていきました。陸路をとって、ガラテヤ地方の教会の人々を励まし、フルギヤへと進んでいきました。



1. エペソでの宣教開始 (1～3節)

①エペソに (1)「アポロがコリントにいた間に、パウロは奥地を**通ってエペソに来た。そして幾人かの弟子に出会って、

18章の末尾にはアポロがエペソで霊に燃えて宣教した後、海を越えてアカヤでの伝道に送り出されたことを見ました。彼はコリントの地で働きをしていたのです。そのころ、パウロはエペソに向かっていました。奥地を**通って、というのはフルギヤから山地を越えてということでしょう。彼は二回伝道旅行の最後でエペソの民から滞在を懇願された時に、「神のみこころなら、帰ってきます。」と伝えました。神はパウロの背中を押し、再びそこに辿り着かせてくださったのです。そして、早速何人かのキリストの弟子たちと面会したのです。

②聖霊を受けたか (2)『**信じたとき、聖霊を受けましたか**』と尋ねると、**彼らは、『いいえ、聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした』と答えた。**』

そしてたずねました。その質問は、第一に彼らが聞いていたイエス・キリストに関する福音の内容がどのようなものであったかということ、第二に彼らが信仰を持った時に聖霊を受けたかということでした。すると、その弟子たちは、聖霊が与えられることについては、聞いたことがないということでした。彼らはアクラとブリスキラとの接触もなかったのでしょう。

③バプテスマについて (3)『**では、どんなバプテスマを受けたのですか**』というと、『**ヨハネのバプテスマです**』と答えた。』

質問はさらに、バプテスマ(洗礼)のことに及びます。どのようなバプテスマを受けたかと、いうものでした。弟子たちは「ヨハネのバプテスマです」と答えました。アポロの影響でしょうか。彼には、キリストについてその全体が伝わっていませんでしたから、彼の伝えていた福音も欠け落しているところがあり、バプテスマについてもヨハネが授けていた、悔い改めのバプテスマに基づいていたのです。

2. 主イエスの御名でバプテスマを受け (4～7節)

①ヨハネのバプテスマ (4)「**そこで、パウロは、『ヨハネは、自分のあとに来られるイエスを信じるように人々に告げて、悔い改めのバプテスマを授けたのです』**と言った。」

ここで、パウロは、ヨハネ自身がイエス・キリストの十字架と復活、聖霊降臨について知らず、ただ旧約聖書に預言されていたメシヤはイエスなのだとして述べています。もちろん、ヨハネが悔い改めを促し、信じる者に、

バプテスマを受けていたのは貴いことでしたが、イエスさまの生涯とお働きの意味は断片的にしか伝えられていなかったのです。

②主イエスの御名で(5)「これを聞いたその人々は、主イエスの御名によってバプテスマを受けた。」

パウロからの教えを聞いた人々は、それを受け入れて信じ、主イエスの御名によってバプテスマを受けました。

③聖霊が彼らに臨み(6-7)「パウロが彼らの上に手を置いたとき、聖霊が彼らに臨まれ、彼らは異言で語ったり、預言をしたりした。その人々は、みなで十二人ほどであった。」

パウロがバプテスマを受けた時に、聖霊がそこに臨みました。ペンテコステと同じような状況となったのです。ここでは、異国の言葉を話すというのではなく、聖霊によって語らせる異言や、聖霊によっていただいた御言葉を預言したりのです。そこにいた弟子たちは、みなで12人ぐらいでした。

3. 会堂での宣教から身を引き(8~9節)

①会堂での宣教(8)「それから、パウロは会堂に入って、三か月の間、大胆に語り、神の国について論じて、彼らを説得しようと努めた。」

パウロはエペソでの宣教も、最初はユダヤ人会堂で行いました。三か月というのはそれ相当期間ですが、大胆にキリストの福音を伝えたのです。また、キリストによって神の国が近づいていることを論じたのです。ユダヤ人たちに、福音を語るときに、パウロはダマスコ途上で主イエスと出会った時のことは必ず伝えていたことでしょう。

②ののしる人々(9)「しかし、ある者たちが心をかたくなにして聞き入れず、会衆の前で、この道をののしったので、」

ユダヤ人たちは、イエスという人物がキリスト(救い主)だと聞かされて、受け入れて信ずる者がいる一方、心を頑なにする人もいました。そういうユダヤ人たちのなかには、パウロの説くことについて、批判や罵りの言葉をはいたのでした。

③ツラノの講堂で(9)「パウロは彼らから身を引き、弟子たちをも退かせて、毎日ツラノの講堂で論じた。」

これまでも否定的な言動をする人々が、それぞれの宣教地において、ありました。今回は、パウロはユダヤ人会堂でそれ以上語ることをやめました。そして、弟子たちをもそこからは退かせました。そして、毎日ツラノという教師が開いていた講堂を借りて、そこで福音を語ったのです。旧約聖書に基づいて論じたことでありましょう。

《結論》

キリスト教会史をたどっていくと「再洗礼派」というのがあります。宗教改革時代の最後のほうに出てきますが、文字通り洗礼を再度、施すことを積極的に行ったグループです。つまり、一度洗礼を受けた人でも、その信仰の内実が全

ない人の信仰を覚醒させて、再洗礼を推進していったのです。彼らは宗教改革運動は手ぬるいと考えていたのです。彼らの主張の根拠になっている聖書箇所の一つが、今朝読んできたなかにあったのです。バプテスマのヨハネのバプテスマを受けてきた人たちに対し、パウロはキリストの福音の全体を教え、主イエスの御名によって、バプテスマを受けました。すると、パウロ自身が再洗礼を認めているのでしょうか。いいえ。パウロはエペソ人への手紙4章4節に「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。」と記しています。それでは、どうして彼は、ここにおいて、再度の洗礼を受けているのでしょうか。

それは、このことに関しては、初代教会時代にあつて、福音が届いていない地域や、届いていても福音の内容が最新でない地域があったという事情を考慮する必要があります。パウロはここにおいて、ヨハネのバプテスマを受けていた弟子たちが、三位一体の主の御名によって洗礼がさずけられた時に、備えられる、すばらしいことが幻のように見させられていたのでしょうか。主もそれを一度限りのこととして、お受け入れくださったと考えられます。ですから、福音の全体が伝わっている時代にあつて、一度だけ記されているこの御言葉を適用することはふさわしくないと考えられるのです。宗教改革の時代の再洗礼派が、この御言葉から再洗礼を推し進めるのには、無理があると考えられます。

ここではむしろ、主イエスの御名によって洗礼が授けられた人々のうちに、聖霊が臨まれたということに注目していきたいと思います。その証拠として、彼らは異言を話し、預言をするようになったとあります。このことで、新しい聖霊の時代が来ているということの主なる神は示してくださっているのです。私たちが聖霊の時代を生きています。聖霊の豊かな働きが私たちのうちに、起きているのです。するとこのような意見があるかもしれません。三位一体の主の御名によって洗礼を受けたのに、この時のように、異言や預言のような現れがないのはどうしてでしょうか。聖霊派の教会では、異言や預言の現れこそが、キリスト信仰の証拠だとしますが、世界全体のキリスト教会見渡せば、それらの現れがなくとも、豊かに生かされている教会が大方を占めていることを考えるときに、主なる神は、異言や預言の現れ以上に、御霊の実が充実することを私たちに求めておられると考えられます。

私たちのうちに聖霊が豊かに臨み、御霊の圧倒的な導きが備えられていくように祈りましょう。主は私たちに「御霊によって歩みなさい」(ガラテヤ5:16)と教えられています。その時に、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」(5:22, 23)といった御霊の実が与えられることを示されています。こうした実りが私たちの日々の歩み、教会の交わりのなかにも、重要であると言えるでしょう。逆に、肉によって歩むならば、「偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、醜悪、遊興」(5:20, 21)といった肉の行いが現れると語られていますから、これらに支配されないように、悔い改めていきましょう。そして、一人一人も、教会も、聖霊の御臨在をいただいて、大いなる恵みに包まれていくように祈っていきましょう。